「スペシャルインタビュー Vol.20」

俳人
夏井 いつき さん

俳句の種を蒔き続けて30余年。好奇心が育む、学び続ける向学心。

8年間の中学の国語教諭を経て、俳人へ転身された夏井いつきさんは、30年以上にわたり俳句の魅力を広めてきました。教諭時代の思い出と、俳句の魅力について伺いました。

中学生の成長を愉しんだ国語の教諭時代

大学では文学部国文科で学び、中学校の国語教諭として働き始めました。

中学校で教鞭をとる愉しさは、わずか3年で生徒達が大きく成長する様子を目の当たりにできることです。中学校生活の3年間は、まさに思春期です。生徒達は、悩みや不安、日々悶々としたものを抱えながら成長していきます。体格も大きくなりますし、なにより、卒業時に自分の進路を決めるという、人生初の一大事と真剣に対峙します。様々な考えを持つ生徒達と、時間を共有し変化や成長を見守ることは、中学校の教諭ならではの体験だと感じていました。

教諭時代に時間を忘れて取り組んだのが、国語の教育教材の研究でした。国語が嫌いな生徒に、国語を勉強してもらうにはどうすればいいのか。生徒一人一人の成長の様子や性格などを加味しながら、まるで趣味のように研究しました。

国語の嫌いな生徒は、国語の何が嫌いなのか。何が苦手なのか。どのように工夫すれば国語を好きになってくれるのか。生徒一人の観察から始まり、グループ（班）としての取り組み方の調査、さらにクラスごとの特徴などを調べ、それぞれに課題を見つけ出し、その改善方法について試行錯誤しました。

その結果、あるクラスは黒板を使って教える一斉授業のスタイルで最も学習能力が上がりました。また別のクラスでは生徒達が互いに教え合い課題を解決するグループ学習で成果が出ました。教育教材の研究の最終目標は、クラスで異なる授業内容でも、学習力を評価する期末テストでは同じ効果となることです。さらに国語力の習得は、生徒達の進路や将来に不可欠な能力ですので、一人でも多くの生徒に正しい国語力を身に着けてほしいと、研究に没頭していました。

国語も俳句も、トレーニングで技術を磨く

教諭時代は、ちょうど校内暴力が問題になっていた頃で、国語教諭として言葉の力を考えさせられました。

なぜ、生徒が暴力に走ってしまうのか。それは、自分の考えや感情をきちんと相手に伝えられなかったり、伝えようとしても正しい言葉を使えず、相手に違うニュアンスで伝わってしまうためです。そうして、相手の誤解を招いてしまい人間関係が壊れてしまう生徒を見てきました。

解決するには、「自分の思いを正確な言葉で相手に伝える」という単純な作業をできるようにするしかなく、言葉の技術を身につけることが大事です。生徒達が「国語は、おもしろい」と思ってくれるようになると、言葉の技術を身に着けるためのトレーニングに参加してくれるようになります。授業がおもしろくなれば、先生への信頼が深まります。それが言葉の技術を身に着けるための第一関門だと考えました。

教諭時代の生徒達への関わり方や考え方は、俳句の種蒔き活動にも通じています。国語と同じで、まず「俳句は、おもしろい」と思わせることが第一関門です。次に、俳句の技術を身に着けるためのトレーニングです。具体的には、数学のように俳句の方程式（ルール）を覚えて使いこなせるように反復練習し、諦めずに継続すれば上達でき、愉しめるようになります。

好奇心を抱き、退屈から脱却する

俳句の原動力は、好奇心です。一つの出来事をしげしげと眺めて観察することで、他人と異なる発想が生まれるようになります。俳句を始めると季語だけでなく、「あの人は何をしているのだろうか?」と興味を持ち、季節の移り変わりだけではない身の回りのあらゆる森羅万象に好奇心を持つことが日常となります。

また、日常の中の雑然としたものの中におもしろさを見つけるために、日々、アンテナを立てて過ごすようにもなります。自分の生活の中で、今まで目に映っていただけで、認識をしていなかった現象やものに、ハッと気づいた瞬間、オリジナルの「俳句のタネ」が生まれ、「俳句は、おもしろい」と実感することができます。

好奇心を持つことは、向学心につながります。

兼題が花の場合では、花の季節、特性、色や香り、育て方、原産地などを次から次へと好奇心旺盛に学ぼうとする向学心が生まれます。俳句を始めた人は、花が咲けば観察に出向き、あれやこれやと調べ知識を得ることが愉しくなります。「退屈な毎日から一転して、忙しい人生になっちゃった」と、いつき組の組員さんも口を揃えておっしゃいます。

リアルな五感が俳人の強みになる

俳人は、向学心で得た知識だけではなく、五感を使って俳句を詠んでいきます。

例えば、昨今のウクライナの悲惨な現状をテレビのニュースで観た場合も、ミサイル攻撃を受けた瓦礫の街の臭いや熱を感じたり、はたまた異様な冷気が押し寄せているのではないかと皮膚の感覚を想像したりするようになります。視覚で得られる情報から、触覚、嗅覚、聴覚の情報を生々しく脳で再生し17音に切り取っていくのです。

今の私の活動は、30年以上続けている「俳句の種」を蒔くことです。日常の小さな気づきから好奇心を抱き、観察力、想像力を磨ける俳句の魅力を伝え、一人でも多くの人に興味を持っていただきたいと活動に励んでいます。

その一つが、数百人から千人規模で開催している句会ライブです。これまで、小学校や中学校でも句会ライブを実施し、子ども達に俳句の魅力を伝えてきましたが、現在は、生涯学習の場として日本全国を回っています。

俳句は、人生の杖となってくれる日本の文芸です。私は、この大好きな俳句を100年先に受け継ぎたいと思っています。

Natsui Itsuki

1957年生まれ。8年間の中学校国語教諭の後、俳人へ転身。「第8回俳壇賞」受賞。俳句集団「いつき組」組長。創作活動に加え、俳句の授業「句会ライブ」、「俳句甲子園」の創設にも携わるなど幅広く活動中。TBS系「プレバト!!」俳句コーナー出演など、テレビやラジオでも活躍。愛媛県松山市公式俳句サイト「俳句ポスト365」、朝日新聞愛媛俳壇、愛媛新聞日曜版小中学生俳句欄、各選者を務める。